

する考えより、指導するもの、教えるものと言う考えが支配的です。パートナーとして共に学校を創り変えていこうと言う立場にいったん立てば、学校行事であれ、HRであれ、授業であれ共同の実践がいくらでも出来るものと思います。最後に、目先の目標(夢)は教育課程の編成でしょう。文部省の名著に「新しい憲法の話」と「新制高等学校教科課程の解説」があります。「新しい憲法の話」は憲法記念日を中心に実施している平和学習において、何回も生徒に読んで聞かせました。しかし「新制高等学校の教科課程の解説」は腰を落ち着けて読んだことがありませんでした。「新制高等学校の教科課程は個々の青年が個人的、社会的、公民的に、そして職業的に最大の発達をとげること目標とすべき」、「ある意味においては新制高等学校の生徒はすべて職業科の生徒であるといえる」と述べた「新制高等学校教科課程

の解説」は今なお新鮮で、読めば読むほど感銘を受けるものです。新しい教育課程を編成しようとしている今、若い先生方といっしょに読みなおしてみれば、きっと勉強になるものと思ひ決断しました。この本の復刻を。たった一冊の貴重な原本を見つけてコピーし、スキャナーで読み取り、OCRで丸ごとテキスト化しようというものです。思ったら吉日、早速作業に取り掛かり現在急ピッチで進行中です。しかしOCRでの読み取り精度が悪い(印刷は不鮮明、旧漢字が多い)だけに、なかなかの難作業です。これの本を皆で勉強してすばらしい教育課程を創り出したいものです。予想だにできない夢、そしてぜひとも実現したい夢、現在進行中の夢(?)。退職まであと数年、もう一頑張りしたいものと、21世紀を迎え、決意した次第です。(岡谷工業高校)

【連載】

技術教育研究会と私の歩み

①

佐々木 享

初期の常任委員会と事務局会議

1970年の組織再編後の技教研の活動は、常任委員会による日常的活動の方針の審議決定と、その決定にしたがって実務を遂行する事務局(会議)の活動とで構成された。

事務局会議は、東京の小平にあった私の自宅で行った。そこでは、『会報』発送などの実務のほか、常任委員会に提出する議案の原案を検討した。日常的な活動の方針は常任委

員会で議論して決めるという方式は、原則を大事にする山脇氏の意見もあり、比較的早くに定着した。山脇与平氏は、事務局会議で原案を検討することには反対されたけれども、常任委員会の会場は都内の神楽坂の教育会館(現在のエミール)、水道橋の東京労音会館(現在の神田パンセ)、太郎次郎社の会議室などを毎月転々としたし、会場の終了時間が大抵厳しく制約されていたから、事前の準備は不可欠であった。前述の山脇与平氏のほ

か、信州大学教育学部を卒業して東京の中学校に就職したばかりの大谷良光氏らが組織再編直後の最初の事務局の活動を支えて下さった。

こうして事務局会議と常任委員会の定例化が軌道に乗り、技教研の活動の基盤ができた。

長谷川淳先生に学ぶ

技術教育研究会の初代代表委員の長谷川淳先生は、私の記憶の限り、事務局会議に出席されたことはなかった。常任委員会にも多分一度も出席されなかったと記憶する。強いて参加することをお願いしなかったし、とくに1971年に先生が名古屋大学に赴任されてからはお願いするのが無理のように思われた。

私は、以前から長谷川先生をお訪ねすることを楽しみにしていた。技教研の事務局長となってからはそのしごとを理由に活用して、三鷹の先生のお宅にしばしばお邪魔した。常任委員会前の相談、常任委員会の結果の報告などの用件をさっさと済ませ、先生のお話を聞いて学ぶことを楽しみにした。ただしそこには厳しさもあった。先生は勉強しない人が嫌いだったようにみえたので、先生が話題とされたことを次回までにはしっかり学習しておく必要があったからである。順序だてられていたわけではなかったけれども、話題になった書物等を思い出すままに並べると、カンパネルラ『太陽の都』、トーマス・モア『ユートピア』、コメニウス『大教授学』、メカニック・インスティテュート、モンジュの画法幾何学、エコール・ポリテクニクの話、マルクス『資本論』第1巻第13章「機械と大工業」、バナール『歴史における科学』、C.P.スノー『二つの文化と科学革命』等々である。またこれらの話題に関連して登場する人物は田中実、遠山啓、矢川徳光、勝田守

一、宮原誠一、梅根悟、岡邦雄、菅井準一、上原専祿等々、長谷川先生の周囲の日本の当代第一級の知識人ばかりであった。こうしたお話をじっくり伺いおそろおそろ感想を述べることは、私にとっては厳しいゼミであった。クループスカヤ『国民教育と民主主義』の勝田訳は分かりにくいなど、しばしばだれその翻訳が話題になることもあった。(いずれも『かわりびょうぶ——長谷川淳先生追悼記念誌』(1996年)に書いたことと重なっている。)

春季合宿研究会を始める

常任委員会や事務局会議は、日常的な実務の遂行と当面する問題の議論に終始しがちなので、少し時間をかけてじっくり学習するという趣旨で、1971年に常任委員や事務局メンバーを中心に、最初の春季合宿研究会が開催された(1971年2月の『会報』第65号を参照)。その後は年末、年始あるいは学年末の3月にしたり、開催時期にはいつも苦勞するけれども、こういう活動を継続するなかで次第に常任委員会や事務局会議の結束が固くなっていったように思う。春季に合宿研究会を開くこの伝統は、今日も続いている。

職業訓練の制度や運動を学ぶ

技教研の会員は中学校や高校の教師が多いためからなりゆきに任せると学校教育中心になりがちなので、私の技術教育研究の初心でもある職業訓練の問題(それは、原正敏先生や長谷川淳先生の関心事でもあった)にも、意を用いるように努めた。全国大会についても、東北民教研から独立して大会をもつようになってからは、小・中学校関係の問題を報告・討論する分科会のほかに、高等学校や高等専門学校の問題を報告・討論する分科会とに分ける方式が定着したので、後者では

職業訓練の問題をも扱うように努力してきた。

職業訓練に関しては、1960年代の後半から70年代の初めにかけて、日本の内外の職業訓練についてたくさん学んだことも忘れられない。たとえば『会報』第65号（1971年2月）には、横山昭信氏の「全総訓の職研活動について」という報告がある。全総訓とは全国総合職業訓練校労働組合の略称である。同組合は、日教組の教研集会に似た研究活動（職研活動）を継続的に熱心に展開しており、原先生や依田氏と私も折にふれて参加したことがあった。また技教研では、1971年の秋には職業訓練関係をテーマとして4回ほどたてつづけに研究会を開き、全国総合職業訓練校労働組合委員長の十七圭三氏や総評の人などの報告を学んだ。その内容の一部は、この時期の『会報』に報告されている。

国際職業訓練シンポジウムに参加する

1971年には、総評・中立労連の主催で、イタリア、フランス、東ドイツ、ソ連から労働組合の関係者を招いた「国際職業訓練シンポジウム」が東京において開催された。私は依頼されて、日教組の榎枝元文氏と並んで議長を務めた。「熟練」を単に技能の習熟度とする日本とそれを「職業資格」とする西

欧諸国との労働慣行の違いなど、頭で少しは知っていたことなどを実際に即して学ぶ私にとっては貴重な機会であった。総評が解体されてしまったいま、私には忘れられない思い出のひとつまでである。

ものごとを論理的に考える

——日本教育法学会への参加

家永三郎教授の教科書検定訴訟や障害児に対する教育問題に関心が高まった（当時は障害児に対する就学義務はまだ実現していなかった）ことを契機に、教育研究者と法律学者とが協力して研究する組織的な場として、1970年8月には日本教育法学会が創設された。ところが、私がかねてから児童生徒の災害に関心を持っていることを知る友人から、その問題を1971年3月に都立大学で開催される日本教育法学会の第1回総会で報告するようにとの話が舞い込んだ。私は入会していないと言うと、入会すればいいんだとのことで報告を引き受けるはめになった。この時の報告が、「学校災害補償について」（日本教育法学会年報第1号『教育権保障の理論と実態』（1972年3月、有斐閣）である。

これを契機として、物事を徹底して首尾一貫する理論を軸として考えることが習性となっている感のある法律の専門家とのおつき合いの輪も広がった。

（続く）

（技術教育研究会・前代表委員）

「技術教育研究」57号

特集 技術教育研究、20世紀から21世紀へ

技術・職業教育研究の20世紀から21世紀へ	佐々木 享
技術教育研究会における 技術科授業研究の成果と課題	近藤 義美
技術・職業教育への思い	幡野 憲正
普通教育としての技術教育の教育目的論再考	田中 喜美
知的障害児技術教育論の構造と展望	尾高 進
[資料] 技術教育研究会年表(2) 1989年～2000年	河野 義頭
[論文] 児童生徒のものづくり経験の意識が 器用感、意欲、技術観に及ぼす影響	土井 康作

【教育実践報告】

アルミの簡易鋳造を取り入れたものづくり領域	小林 秀
高校普通科における新版情報テキスト『自動化から始めるコンピュータ学習』の実践	鈴木 善晴

【諸外国の技術・職業教育】

事実教授 (Sachunterricht) における「技術」の問題	鈴木 隆司
-----------------------------------	-------

【技術・職業教育の動向】

フランスの小学校における技術教育の新動向	上里 正男
----------------------	-------

【書評】

『ITの授業革命「情報コンピュータ」』東京書籍	編集部
-------------------------	-----